市内遺跡発掘調査報告19
日田市埋蔵文化財調査報告書第131集

手崎遺跡３次

２０１８年

日田市教育委員会

遺跡遠景（北から）

調査区全景（上が東）

序　　文

この報告書は、当委員会が平成 27 年に病院施設兼個人住宅建設工事に伴って発掘調査を行った手崎遺跡の調査内容をまとめたものです。

調査では、弥生時代・古代の竪穴建物や土坑などの生活遺構が確認されました。また、調査地の南側で行われた 1 次調査でも同時期の遺構が確認されており、今回の調査によって、弥生時代以降にこの地域で暮らす人々の生活の様子が分かってきました。

こうした発掘調査の成果をまとめた本書が、今後、文化財の保護や地域の歴史、学術研究等にご活用いただければ幸いです。

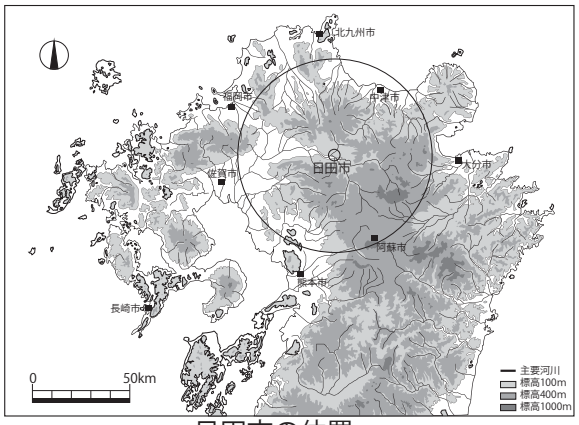
最後になりましたが、作業に従事いただきました皆様方や、調査にご協力いただきました関係者の方々に対しまして心から厚くお礼申し上げます。

平成 30 年 3 月

日田市教育委員会
教育長　三笘　眞治郎

例　　言

1. 本書は、病院施設兼個人住宅建設工事に先立ち、平成 27 年度に日田市教育委員会が実施した「手崎遺跡 3 次調査」の発掘調査報告書である。
2. 調査は病院施設兼個人住宅建設工事に伴い行った。病院施設部分については福田由紀子氏の委託業務として、日田市が受託し、個人住宅部分に関しては国・県・市の補助事業（市内遺跡等調査事業）として、日田市教育委員会が事業主体となり実施した。なお、調査費用については、病院施設部分と個人住宅部分の面積比により負担額を按分した。
3. 調査現場での実測は、株式会社埋蔵文化財サポートシステム大分支店に一部委託し、写真撮影等は担当者が行った。
4. 本書に掲載した遺構製図の一部は株式会社埋蔵文化財サポートシステム大分支店の委託成果品を使用し、それ以外は用松操の協力のもと担当者が行った。遺物実測は、雅企画有限会社に委託した成果品を使用し、製図は用松の協力のもと担当者が行った。
5. 遺物写真撮影は雅企画有限会社に委託した成果品を使用した。
6. 挿図中の方位は全て座標北を示し、国土座標は世界測地系に基づいている。
7. 写真図版の遺物に付した数字番号は、全て挿図番号に対応する。
8. 出土遺物及び図面・写真類は日田市埋蔵文化財センターにて保管している。
9. 本書の執筆・編集は上原が行った。



日田市の位置

大分県の行政地区

本文目次

Ⅰ　調査の経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
Ⅱ　遺跡の位置と環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
Ⅲ　調査の内容
（1）調査の概要　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4
（2）遺構と遺物　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4
Ⅳ　総括・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11

挿図目次

第１図　調査区位置図（1/2,500）・・・・・・・・・・ 2
第２図　調査区配置図（1/800）・・・・・・・・・・・ 2
第３図　周辺遺跡分布図（1/25,000）・・・・・・・・・ 3
第４図　調査区全体図（1/200）、8 ～ 10 トレンチ
平面及び土層断面（1/60）・・・・・・ 5
第５図　調査区東側全体図（1/100）
調査区東壁土層（1/40）・・・・・・・ 6
第６図　1・2 号竪穴建物、1 号竪穴建物カマド
実測図（1/60、1/40）・・・・・・・・ 7
第７図　1・2 号土坑実測図（1/60）・・・・・・・・・・ 8
第８図　出土遺物実測図（1/4、1/2）・・・・・・・・・ 9
第９図　1 ～ 3 次調査区位置図（1/1,000）・・・・・10

挿図目次

第１表　出土土器観察表①　・・・・・・・・・・・・・11
第２表　出土土器観察表②　・・・・・・・・・・・・・12
第３表　出土鉄器観察表　　・・・・・・・・・・・・・12

本文写真目次

本文写真１　重機使用状況・・・・・・・・・・・・・ 1
本文写真２　作業風景①・・・・・・・・・・・・・・ 1
本文写真３　作業風景②・・・・・・・・・・・・・・ 1

写真図版目次

巻頭図版
遺跡遠景（北から）
調査区全景（上が東）
写真図版１
調査区周辺全景（西から）
調査区東側完掘状況（西から）
写真図版２
調査区東側完掘状況（北から）
調査区西側完掘状況（東から）
写真図版３
①１号竪穴建物完掘状況（南西から）
②１号竪穴建物カマド遺物出土状況（南西から）
③１号竪穴建物カマド完掘状況（南西から）
④１竪穴建物遺物出土状況（南から）
⑤２号竪穴建物完掘状況（南西から）
⑥１号土坑完掘状況（南から）
⑦２号土坑完掘状況（北から）
⑧２号土坑土層断面（北から）
写真図版４
①調査区東壁土層堆積状況（西から）
②８トレンチ完掘状況（南から）
③９トレンチ完掘状況（東から）
④ 10 トレンチ完掘状況（東から）
出土遺物
写真図版５
出土遺物

Ⅰ　調査の経過

平成 27 年 2 月 25 日付けで福田由紀子氏より市教育委員会あてに、大字高瀬字手崎 1225 － 1 ほかについて医療施設兼個人住宅建築工事に先立つ埋蔵文化財の所在に関する照会文書（事前審査番号 2014048）が提出された。この開発予定地は周知の埋蔵文化財包蔵地である手崎遺跡に該当し、平成 12 年度の店舗建設に伴い行われた予備調査で弥生時代や古墳時代の竪穴建物など遺構が発見されており、対象地に遺跡が存在する可能性が非常に高いと判断した。その為、予備調査は行わず、その取扱いについて協議が必要である旨の文書回答を行った。

その後、開発の内容から遺跡の保存が困難であることから、予定地を対象とした発掘調査の実施に向けて開発主と協議を重ね、建物基礎によって削平が及ぶ範囲を中心に調査面積 266 ㎡を対象として発掘調査を行うこととなった。

調査費用については、医療施設の営利部分と個人住宅の非営利部分があることから、市の規定に基づき、延床面積の割合から按分する事とし、営利部分は、受託事業として事業主と委託契約を行い、非営利部分については、国・県・市の補助事業として行うこととした。

調査範囲の内、南東側は、検出深度が浅く、建物基礎や地中梁などによって大きく破壊されることから全面調査とし、北西側については、検出深度が深く、破壊が及ぶのは基礎部分のみであったことから、基礎部分のトレンチ調査とした。

5 月 26 日に発掘調査依頼が提出され、これを受けて平成 27 年 5 月 29 日に事業主との委託契約を取り交わし、6 月 3 日から 7 月 2 日までの間、発掘調査を実施した。また、整理作業は平成 28 年 12 月 1 日から平成 29 年 3 月 16 日の間実施し、平成 29 年度に報告書作成を行った。現地での発掘調査の経過は次の通りである。

６月　３日　重機による表土除去・遺構検出開始
６月１６日　作業員による遺構検出および遺構掘り下げを開始
６月２３日　調査補助業務着手
　　（株式会社埋蔵文化財サポートシステム大分支店）
６月２９日　掘り下げ完了
６月３０日　機材撤収
７月　２日　空撮実施、現地での作業完了

平成 27 ～ 29 年度の調査組織は次のとおりである。

調査主体　　日田市教育委員会
調査責任者　三笘眞治郎（同教育長）
調査統括　　柴尾健二（文化財保護課長；27 年度）
　　池田寿生（同課長;28 年度）、梶原康弘（同課長;29 年度）
調査事務　　園田恭一郎（同主幹（総括）/ ～ 27 年 9 月）
　　古賀信一（同主幹（総括）：27 年 10 月～）
　　諫山温子（同主事；26・27 年度）
　　行時桂子（同主査）、若杉竜太（同主査）

写真１　重機使用状況

写真２　作業風景①

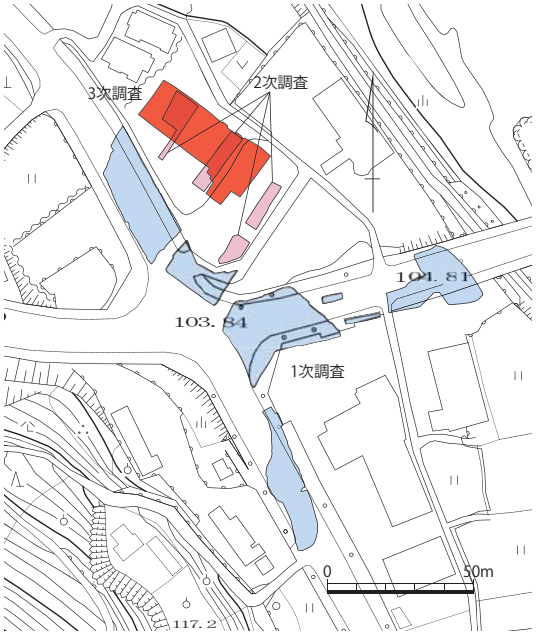
写真３　作業風景②

渡邉隆行（同主査）、長祐一郎（同主査；28・29 年度）

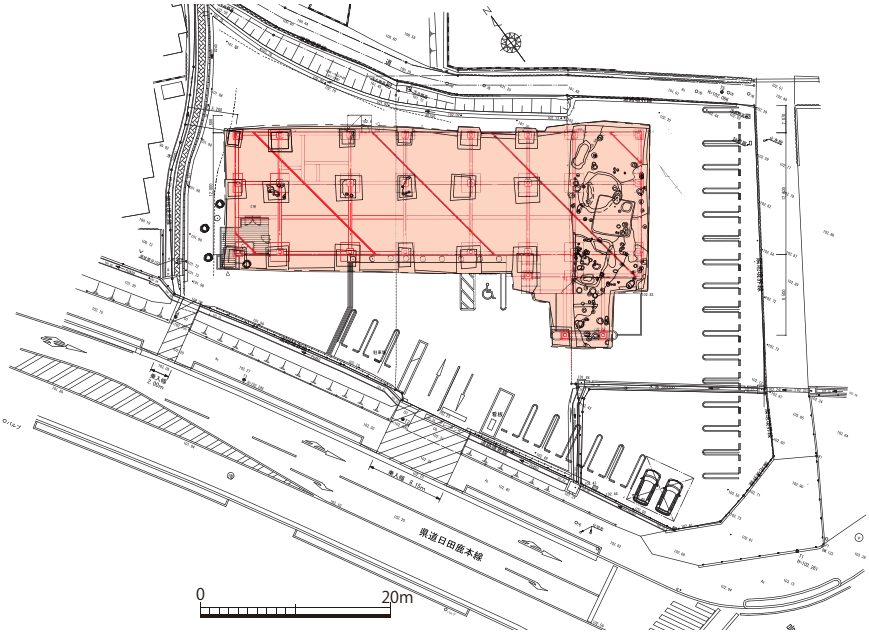
調　査　員　上原翔平（同主任）

発掘作業員　秋吉新六、加藤祐一、合原建国美、河津モリ、北澤幾子、財津真弓、松下宣男、宮木博幸、森山敬一郎

整理作業員　髙瀬真奈美、武石和美、田中美保、用松操、吉田里美



第 1 図　調査区位置図（1/2,500）



第 2 図　調査区配置図（1/800）

Ⅱ　遺跡の位置と環境

手崎遺跡は、日田盆地南部を流れる大山川と東から流れ込む玖珠川との合流点より大山側の上流約 500m 地点、大山川左岸の標高約 100 mの河岸段丘上に位置している。この河岸段丘の西側にあたる三隈川左岸一帯には、津江山系から派生した尾根が幾重にものび、その先端には沖積地や比高差 30 m 程の台地や丘陵が広がっている。その中央部を流れる高瀬川が三隈川と合流することでこの一帯には広大な沖積地が形成される。また、尾根筋に挟まれた狭小な谷部には湧水点が多くあり、耕作などに利用されている。こうした三隈川左岸一帯にある沖積地や台地には多くの古代遺跡が所在している。

手崎遺跡ではこれまで２度の調査が行われている。本調査区の南側で道路建設に伴い行われた 1 次調査では、縄文時代後期の住居をはじめ弥生時代～古代の生活遺構が確認され、今回の調査区とほぼ同じ位置で店舗建設に伴い行われた２次調査では、弥生時代と古墳時代の住居などが確認されている。

次に遺跡の所在する三隈川左岸一帯を中心に本遺跡と周辺の遺跡の動向を時代毎にみていく。

旧石器時代の明らかな遺構は見つかっていないが、手崎遺跡 1 次調査で台形様石器などが採集されている。

縄文時代になると手崎遺跡 1 次調査で、後期・晩期頃の住居跡が見られるようになり、この周辺ではこの頃から集落が営まれるようになる。この他、口が原遺跡 (2)・上野第 1 遺跡 (3) などでも土器や石器が見つかっている。

弥生時代の遺跡としては、環濠を伴う集落が確認された惣田遺跡 (4) がある。後期になると惣田遺跡の背後にあたる丘陵にある口が原遺跡で小集落が営まれ、手崎遺跡１、２次調査でも竪穴建物が確認されている。

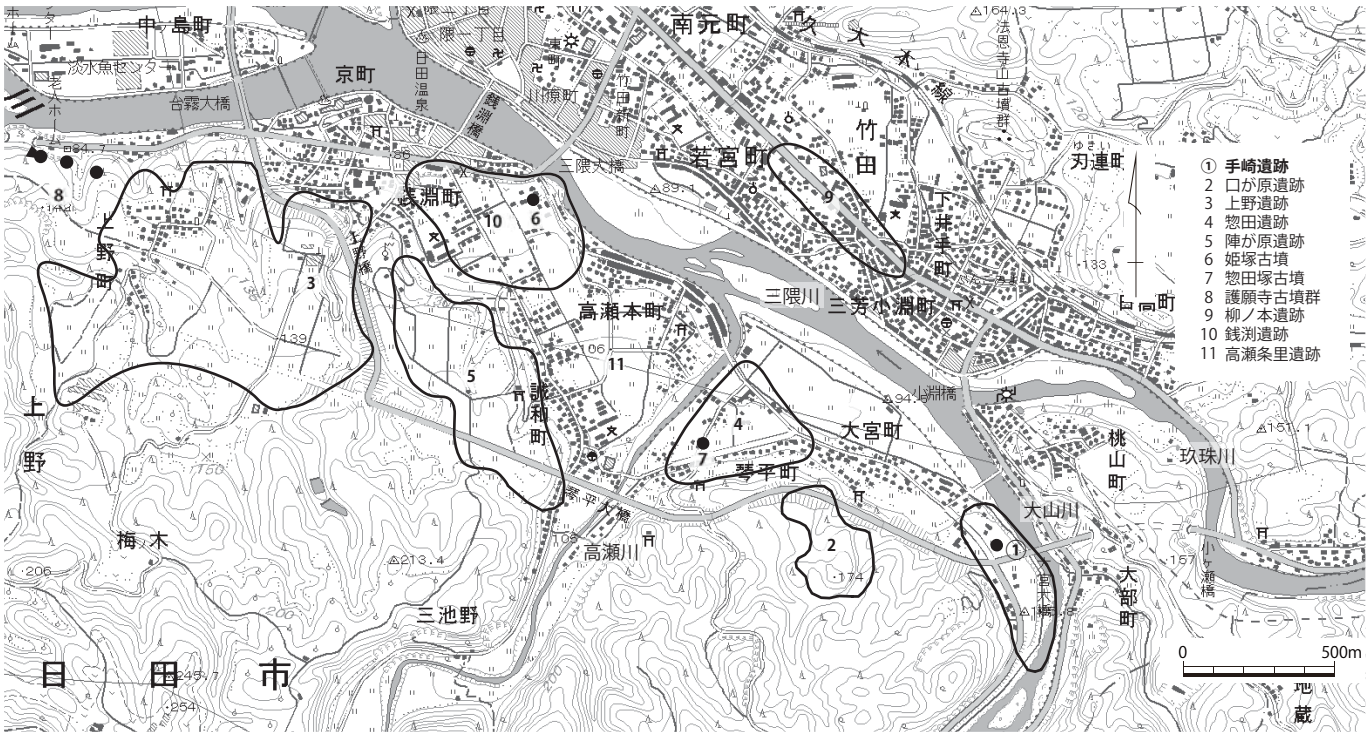
古墳時代の集落の遺跡としては手崎遺跡１、２次調査・口が原遺跡・陣が原遺跡 (5) 等が挙げられる。また、墳墓は中期の石棺系竪穴式石室を２つもつとされる姫塚古墳 (6)、後期の横穴式石室をもつ惣田塚古墳 (7) がある。また、上野から石井へ抜ける旧道沿いに前方後円墳１基を含む、護願寺古墳群 (8) があるほか、大山川と玖珠川との合流部を北に下った三隈川右岸の沖積地には集落と甕棺墓などからなる柳ノ本遺跡 (9) が所在する。

古代の遺跡としては、7 世紀の水路遺構がみつかった惣田遺跡をはじめ、口が原遺跡・陣が原遺跡などで集落が確認されている。そしてこの時代で特筆されるのは、上野第１遺跡の掘立柱建物群である。律令期、三隈川南岸一帯は日田郡五郷のうち、「石井郷」に比定されており、郷内には「石井駅」が設置されたとされる。上野第１遺跡では「豊馬豊馬」と刻書のある権が出土しており、上野遺跡が駅そのものであるかどうかは判断できないが、その付近の官道が通っていたことを示すと考えられる。また、姫塚古墳に程近い銭渕遺跡（10）においては、方形掘り方をもつ大型の掘立柱建物が確認されており、これらのことからこの一帯には古くから公的施設が存在していたものと想定される。

一方で、続く平安時代の遺跡はほとんど確認されておらず、手崎遺跡１次調査で９世紀の土坑と土器が見つかった程度である。

中世には三隈川南岸のなかでも高瀬地区に５つの寺院があったとされ、そのうちの１つ、永平寺 (いひじ) 跡には現在 1311(応長元) 年・1313(正和 2) 年銘の板碑 (ともに市指定有形文化財) が残されており、付近で行われた高瀬条里遺跡 (11) 永平寺地区 の調査では当時のものと考えられる掘立柱建物が確認されている。

《参考文献》田中裕介　『日田市高瀬遺跡群の調査 3 上野第 1 遺跡』一般国道 210 号日田バイパス建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書 III 大分県教育委員会 2001
高橋徹ほか『日田市高瀬遺跡群の調査 4 寺内遺跡 / 上野第 2 遺跡』同上 IV 大分県教育委員会 2002
『日田市史』日田市 1990
その他日田市教育委員会発行の関係遺跡の発掘調査報告書など



第３図　周辺遺跡分布図（1/25,000）

Ⅲ　調査の内容

（1）調査の概要（第４図）

調査対象地では２次調査で現地表面から約 1.0 ～ 2.0m 下で古墳時代後期の竪穴建物３軒、弥生土器が出土した竪穴建物１軒が確認されていることから、今回の調査でも同様の遺構が確認されると想定された。また、調査範囲は建物予定地の内、工事によって破壊の及ぶ基礎部分を対象としたが、地形が南から北に向かって深くなっていた事から、検出面が浅い東側調査区は全面調査、検出面が深い、西側調査区は基礎部分のみを対象とした。

調査は、東側調査区から重機により表土除去を行い、現地表面から深さ約 50cm で暗黄褐色土の自然堆積層（地山）を確認（第４図）し、竪穴建物２軒、土坑２基、ピットを多数検出した。地山面までは、アスファルト・バラス及び客土（1･2 層）の下に暗褐色土（3 層）、黒褐色土（4 層）の水田層があり、その下位では黒色土（第 5 層）と淡黒褐色土（6 層）が堆積していた。この５・６層は、地形に沿って層の厚さが南から北に薄くなることから遺構埋没後の自然堆積層と想定され、調査で確認されている遺構の時期から古代以降に堆積したものと想定している。また、この地山を掘り込む遺構は、大きく暗褐色土、暗茶褐色土と黒褐色土があり、暗褐色土の埋土が多い。遺構埋土による時期差は明確には出来なかったが、黒褐色土の埋土については、水田層（3 層）から掘り込まれている事から新しい時期のものと想定される（第４図）。

西側調査区では、19 箇所のトレンチ調査を行い、深さ約 80cm で黄褐色土の地山を確認した。8 ～ 10 トレンチでは、ピット数基が検出された。このうち、9 トレンチのピットは、2 次調査で確認された弥生時代の竪穴建物（4 住）のピットである可能性がある。また、8 トレンチでは大きさが 70cm で深さが 30cm 程のピットを検出しており、これらも住居跡の可能性がある。このように遺構は 8 ～ 10 トレンチに限られていることから、遺構の範囲は限定的で遺構密度が低いと想定されていた結果を追認出来た。これらのトレンチから遺物は出土していない。

以下、検出された遺構および出土遺物の説明を行う。なお、遺物の時期比定には、Ⅳに提示した参考文献を利用し、該当型式は筆者名などを付して解説するものとする。

（2）遺構と遺物（第５～８図）

１. 竪穴建物

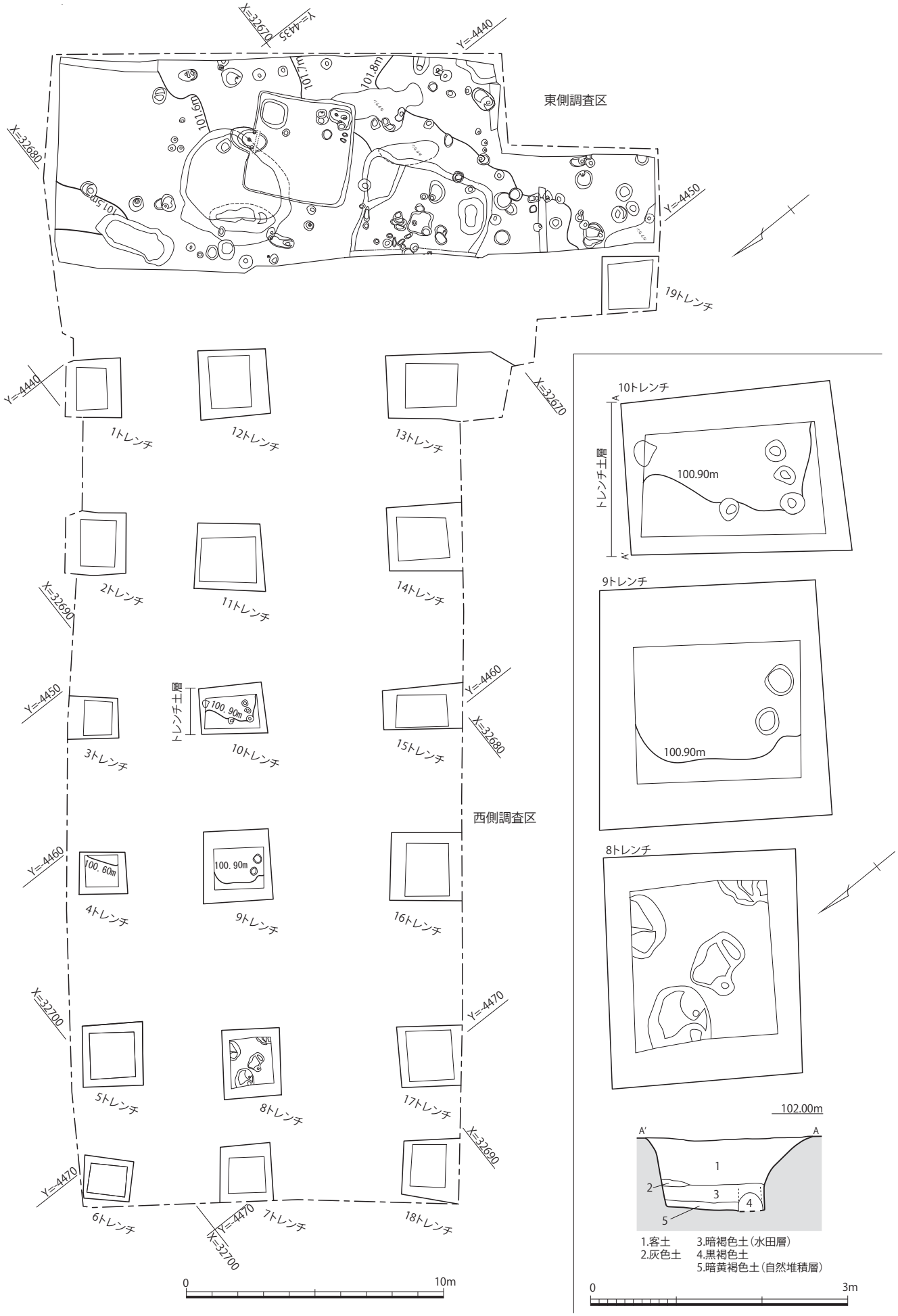
1 号竪穴建物（第６図、図版３）

東側調査区中央付近に位置し、2 号土坑を切る。遺構埋土は暗褐色土で南北約 4.1m、東西約 4.2m、深さ約 25cm を測り、平面形状は方形で、カマドが北側に敷設される。無柱穴の建物で、カマド右側には屋内土坑が見られる。カマドは壁から張り出しており、壁面をそのまま利用したのか壁の根元には袖石の抜き取り痕が見られ、その中央に火床面が確認され、カマド祭祀に使うものか上層部には土器が多数出土した。袖石の痕跡から幅約 60cm、奥行き約 90cm を測る。

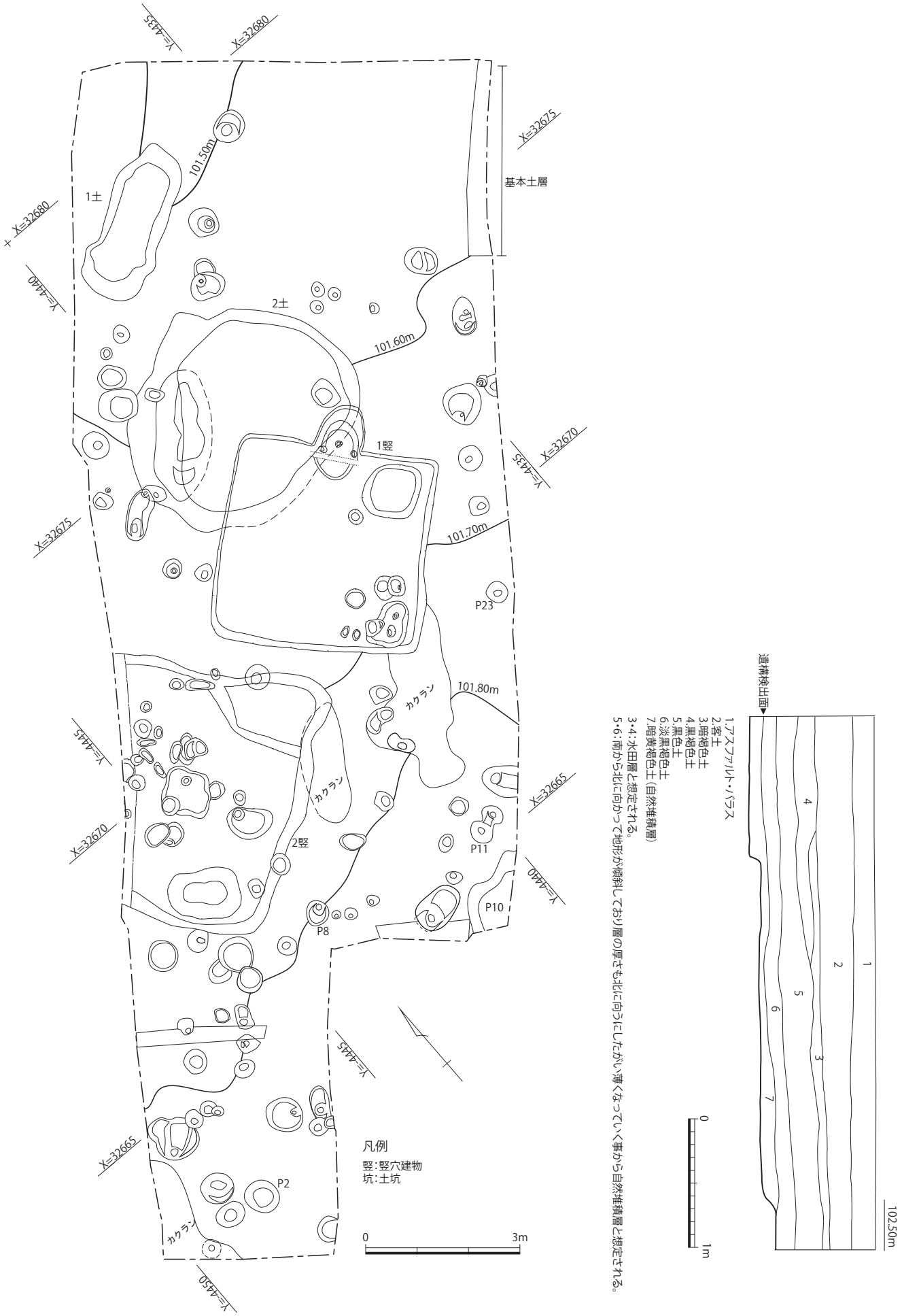
出土遺物（第８図 1 ～ 14）は須恵器蓋・坏のほか、カマドからは土師器の甕や鉢・坏が複数見つかっている。須恵器蓋の口縁端部が嘴状になっていることなどから遺構の時期は、中村Ⅳ‐Ⅰ・Ⅱ期頃の８世紀前半代と考えておきたい。

２号竪穴建物（第６図、図版３）

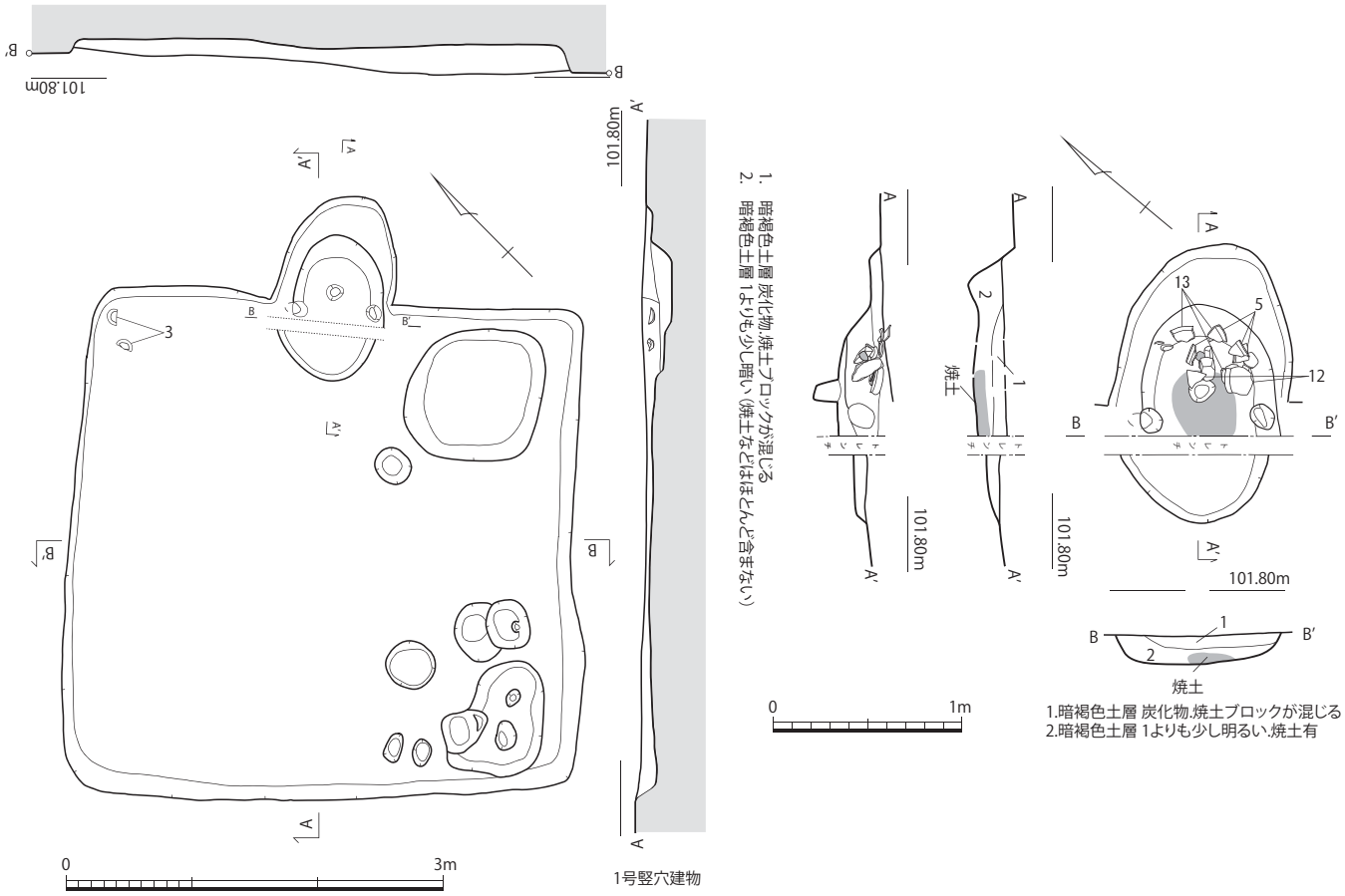
東側調査区中央よりやや南側に位置し、西側の一部は調査区外である。遺構埋土は暗茶褐色土で南北約 5.0m、東西約 3.6m+ α、深さ約 45cm を測り、平面形状は方形と考えられる。竪穴中央部、東西方向に深さ約 40cm を測る主柱穴を２本確認し、主柱穴に挟まれた建物中央部分に窪みがある。これが炉になると考えられるが、焼土などは見つからなかった。このほか、南側に屋内土坑、北東隅にベッド状遺構が確認された。

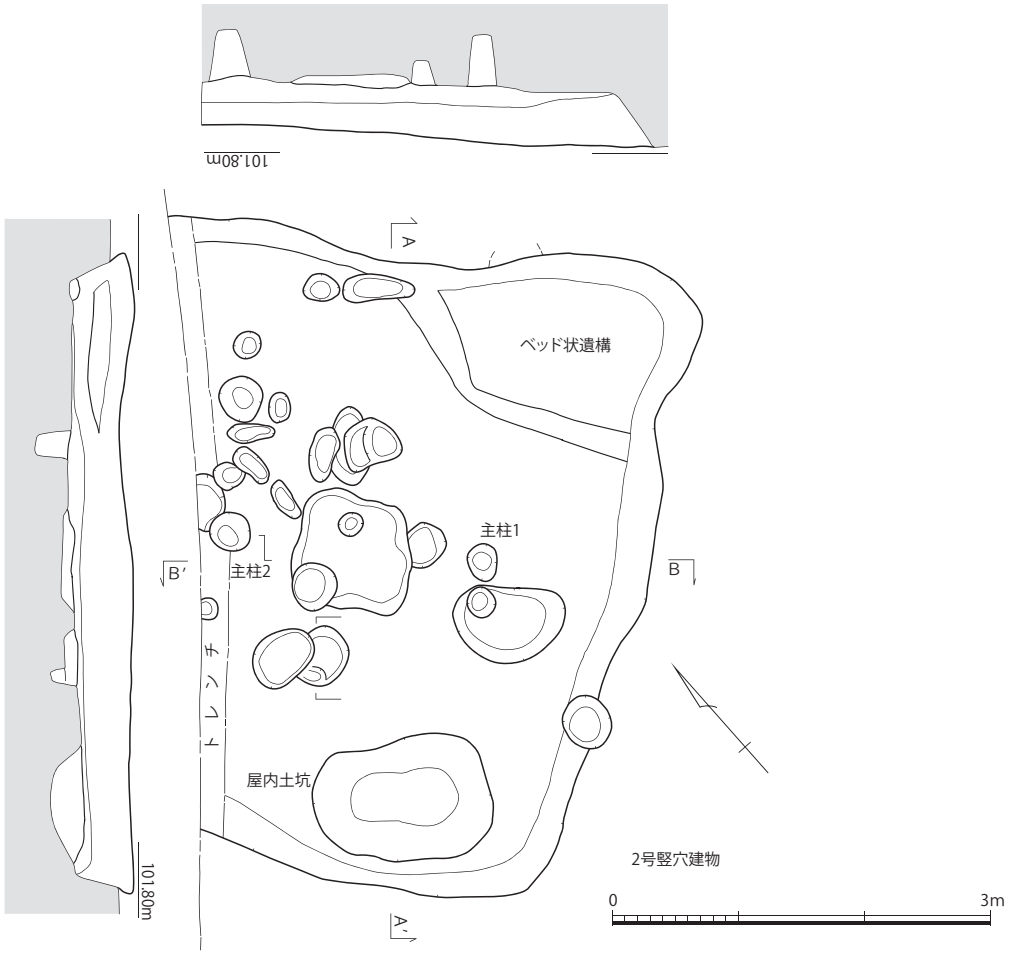


第４図　調査区全体図（1/200）、8 ～ 10 トレンチ平面及び土層断面（1/60）

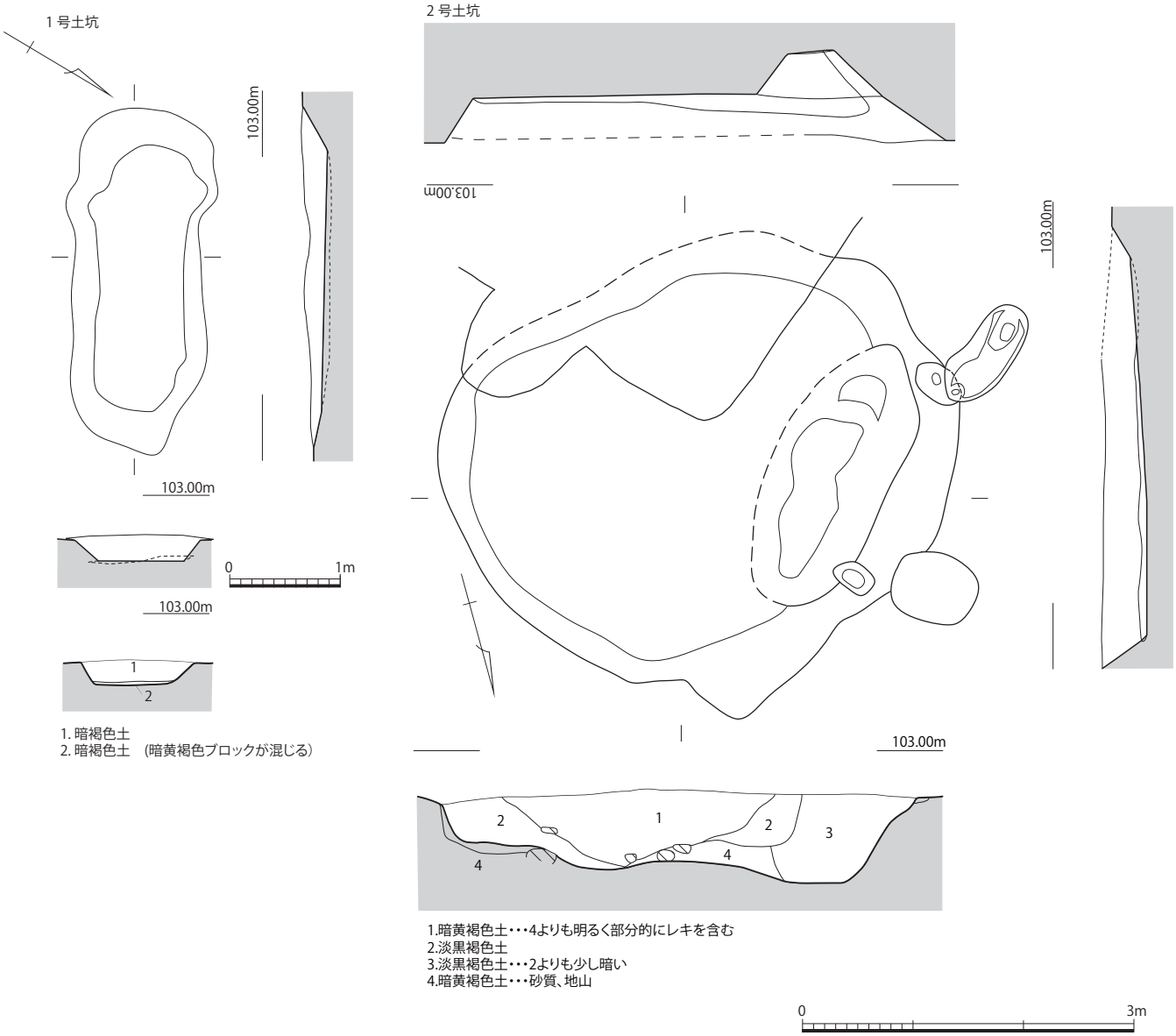


第 5 図　調査区東側全体図（1/100）、調査区東壁土層（1/40）





第 6 図　1・2 号竪穴建物、1 号竪穴建物カマド実測図（1/60・1/40）



第 7 図　1・2 号土坑実測図（1/60）

出土遺物（第 7 図 15 ～ 23）は弥生土器の甕が見つかっており、甕の底部の形状がレンズ状を呈する事や口縁部などから、渡邉後期 3・4 期頃の弥生時代後期中～後半頃と考えておく。

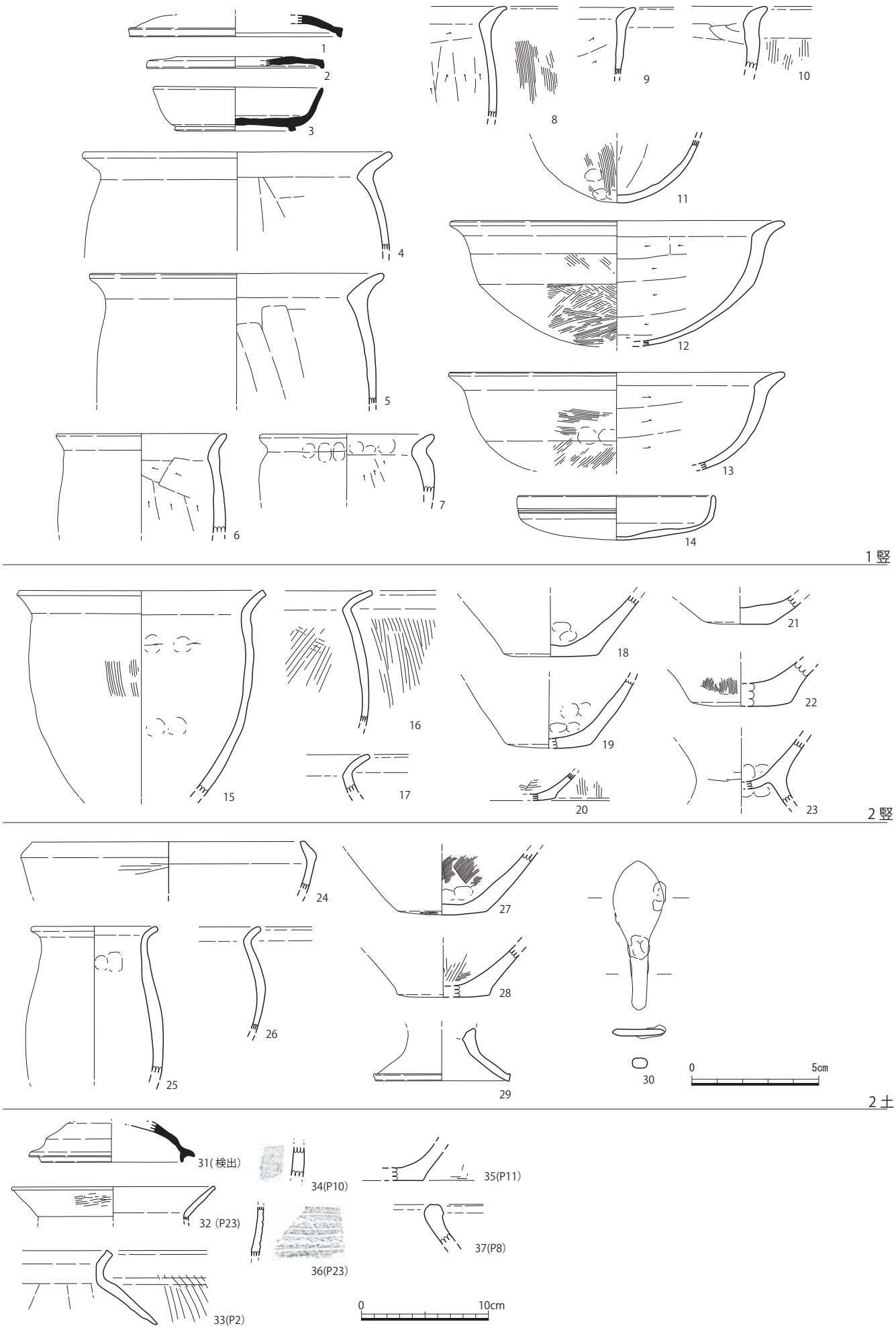
2. 土坑

1 号土坑（第 7 図、図版 3）

東側調査区北側に位置する。遺構埋土は暗褐色土で南北約 3.0m、東西約 1.1m、深さ約 23cm を測り、平面形状は楕円形で底部は水平である。図示できる遺物は出土していないが、遺構埋土から 1 号竪穴建物と同時期の可能性がある。

2 号土坑（第 7 図、図版 3）

東側調査区北側に位置し、南側の一部を 1 号竪穴建物に切られる。南北約 3.8m、東西 4.3m、深さ約 35cm を測り、平面形状はやや楕円系を呈し、底部はほぼ水平である。土層堆積から、1・2 層は使用後に廃棄され自然堆積したものと考えられ、遺物の出土は概ね 1 層からであった。また、この土坑を掘り下げた床面には別の土坑状の掘り込み（3 層）が見られ、2 層に切られていた。こうした土層観察から 3 層は土坑掘り込み前に所在した別遺構の可能性も考えられるが、ここでは同一遺構として報告する。なお、土坑の用途については判然としない。

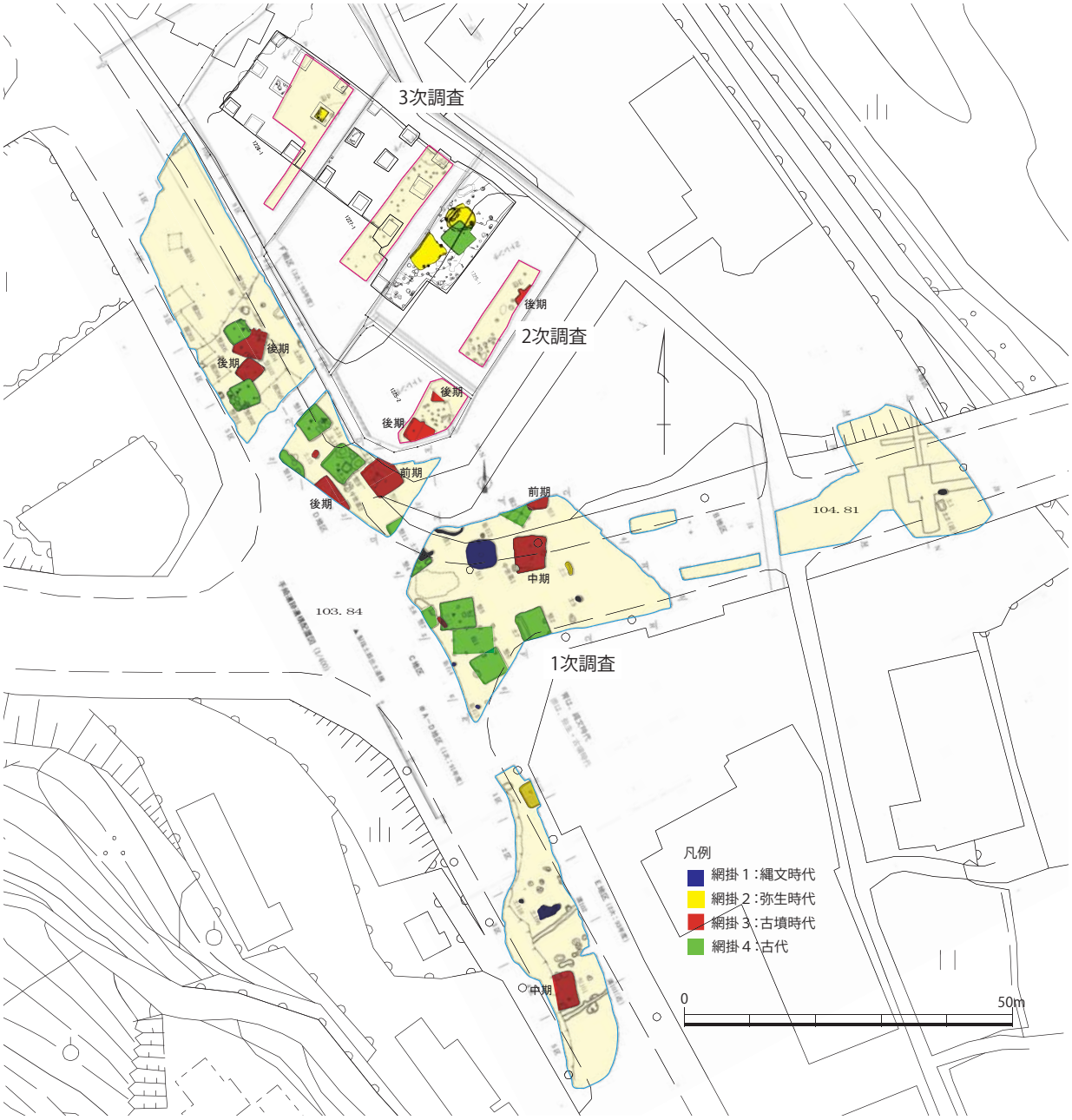


第 8 図　出土遺物実測図（1/4、1/2）

出土遺物（第７図 24 ～ 30）は弥生土器甕や鉄鏃が見つかっており、甕の底部の形状がレンズ底気味であることなどから渡邉後期3･4期頃の弥生時代後期中～後期頃で２号竪穴建物と同時期のものと想定しておく。なお、縄文土器が１点出土しているが、埋没過程で周囲から混入したものと考えておく。

３. その他の出土遺物（第８図 31 ～ 37）

ピットは調査区全体で確認されており、一部からは古墳時代後期から古代の遺物も出土していることから、竪穴建物や掘立柱建物の主柱穴になる可能性がある。このほか、検出時などもふくめると須恵器蓋や土師器甕や弥生土器甕、縄文土器片などが出土している。縄文土器はその文様から縄文時代後期中葉の西平式と考えられる。１次調査からも同時期の遺物の出土が見られることから当時の活動範囲がこの周囲まで広がっていた可能性が考えられる。



第９図　１～３次調査位置図（1/1,000）

Ⅳ　総括

今回の調査では、竪穴建物２軒、土坑２基、ピット多数を確認した。

１号竪穴建物は、北側にカマドが付設される無柱穴の建物で、出土遺物から８世紀前半代と考えられる。２号竪穴建物については、方形のベッド状遺構を有する２本柱の建物で、出土遺物から渡邉編年の後期３・４期頃、弥生時代後期中葉～後期頃である。また、２号土坑についても同時期の遺構と想定される。

このように、本調査では、大きく弥生時代後期と古代の２時期の生活遺構を確認した。このほか、ピットなどから１次調査と同じ縄文時代後期の土器や古墳時代後期頃の土器が出土するなど、当時の人々の活動範囲の広がりを知ることができた。

なお、本調査区の南側で行われた１次調査では、縄文時代後期の竪穴建物が１軒、弥生時代後期後半には１軒の竪穴建物が確認されている。古墳時代は前期２軒、中期２軒、後期は６軒の竪穴建物が確認され、８世紀には 11 軒の竪穴建物と２棟の掘立柱建物が確認される。また、今回の調査区とほぼ同じ位置で行われた２次調査では、弥生時代の竪穴建物１軒と古墳時代後期の竪穴建物３軒が確認されている。（第９図）

以上の成果を元に本遺跡の変遷と特徴をまとめると、縄文時代後期後半から小規模な集落が出現するものの、その生活領域は３次調査のピット出土の土器などから、大山川沿いまで広がるキャンプサイト的なものと想定される。次に大きく期間をあけた弥生時代後期後半には２軒の建物が確認されるのみでその規模は小さく、存続期間も短い。古墳時代の前・中期では弥生時代と同規模の集落が確認される程度であるが、後期後半になると６軒と建物数が増え、集落規模が大きくなる。続く、古代においても 11 軒の建物からなる集落が営まれるようになる。

さて、こうした変遷の中でも古墳時代後期以降の集落動向は、本遺跡の立地と関係していると考えられる。遺跡の所在する河岸段丘は、大山川と玖珠川の合流点に近く、上流域とを結ぶ河川交通の要所であったと想定される。この段丘の位置する三隈川左岸一帯に所在する沖積微高地や台地は、古代の遺跡が数多く確認され、古代日田郡の石井郷に比定されている。また、この遺跡群の中には「豊馬豊馬」銘の権が出土した上野第１遺跡などがあり、古代交通の要所となる石井駅の推定地と言われている。本遺跡もこのような遺跡群で構成される石井郷の中に含まれており、さらに北西へと広がる各河川に所在する集落へと向かう起点となる場所であったと推測される。古墳時代後期以降に集落規模は大きくなるのは、こうした律令化に向かう中での交通網の整備と関連する可能性を想定しておきたい。

以上のように、今回の調査では１・２次調査の成果を追認する内容であったが、改めて本遺跡の特徴や変遷を捉えるとともに日田盆地における重要性を確認する貴重な成果を得ることができたと言える。

参考文献

田中裕介　編　『日田市高瀬遺跡群の調査』１大分県教育委員会　1995
行時志郎　　「手崎遺跡２次」『平成 12 年度（2000 年度）日田市埋蔵文化財年報』 日田市教育委員会　2001
渡邉隆行　　「調査総括～日田市域の弥生土器の変遷と吹上遺跡出土土器の特色～」『吹上遺跡 4』日田市文化財調査報告書第 112 集　2014
中村　浩　編　『須恵器集成図録２』（近畿編）　柏書房　1996

第１表　出土土器観察表①

挿図番号	遺構名	種別	器種	法量				調整		胎土	焼成	色調				備考
				口径	胴部径	底径	器高	内面	外面			内面	Hue	外面	Hue	
第８図１	１号竪穴	須恵器	蓋	(16.6)	-	-	(1.7)	回転ナデ	回転ナデ	E	良	灰色	N5/	灰色	N5/	
第８図２	１号竪穴	須恵器	蓋	(14.0)	-	-	(0.9)	回転ナデ	回転ヘラケズリ・回転ナデ	E	良	灰色	N5/	灰色	N5/	
第８図３	１号竪穴	須恵器	坏	13.2	-	9.5	3.5	回転ナデ・ナデ	回転ナデ・回転ヘラ切離し	E・F	良	灰色	N6/	灰色	N6/	外面ヘラ記号か
第８図４	１号竪穴	土師器	甕	(24.0)	-	-	(7.8)	ヨコナデ・ケズリ	ヨコナデ・ナデ	A・C・D・E	良	明褐色	7.5YR5/6	明褐色	7.5YR5/6	
第８図５	１号竪穴	土師器	甕	(22.8)	-	-	(10.3)	ヨコナデ・ケズリ	ヨコナデ・ナデ	A・C・E	良	橙色	7.5YR6/6	橙色	7.5YR6/6	外面に黒斑あり

第２表　出土土器観察表②

挿図番号	遺構名	種別	器種	法量				調整		胎土	焼成	色調				備考
				口径	胴部径	底径	器高	内面	外面			内面	Hue	外面	Hue	
第８図６	１号竪穴	土師器	甕	(13.2)	-	-	(7.8)	ヨコナデ・ケズリ	ヨコナデ・ナデ	A・C・E	良	にぶい褐色	7.5YR5/3	橙色	7.5YR6/4	
第８図７	１号竪穴	土師器	甕	(13.2)	-	-	(5.2)	指オサエ後ヨコナデ・ケズリ	指オサエ後ヨコナデ・ナデ	A・C・D・E	やや不良	にぶい橙色	7.5YR7/4	にぶい橙色	7.5YR7/4	
第８図８	１号竪穴	土師器	甕	-	-	-	(8.8)	ヨコナデ・ケズリ	ヨコナデ・ハケ目	A・C・E	良	明赤褐色	5YR5/6	明赤褐色	5YR5/6	
第８図９	１号竪穴	土師器	甕	-	-	-	(5.3)	ヨコナデ・ケズリ	表面剥落のため不明瞭	A・C・E	良	にぶい赤褐色	5YR5/4	にぶい橙色	5YR6/4	
第８図10	１号竪穴	土師器	甕	-	-	-	(5.1)	ヨコナデ・ケズリ	ヨコナデ・ハケ目	A・C・D・E	良	橙色	5YR6/6	橙色	5YR6/6	
第８図11	１号竪穴	土師器	甕	-	-	-	(4.9)	ケズリ後ナデ	指オサエ後ハケ目・ナデ	A・C・E	良	明赤褐色	5YR5/6	明赤褐色	5YR5/6	
第８図12	１号竪穴	土師器	鉢	(26.4)	-	-	(9.9)	ヨコナデ・ケズリ	ヨコナデ・ハケ目・ナデ	A・C・E	良	橙色	5YR6/6	橙色	5YR6/6	内面にスス付着
第８図13	１号竪穴	土師器	鉢	(26.5)	-	-	(7.7)	ヨコナデ・ケズリ	ヨコナデ・ハケ目後ナデ・指オサエ	A・C・E	良	にぶい赤褐色	5YR5/4	橙色	5YR6/6	
第８図14	１号竪穴	土師器	坏	(15.2)	-	(15.0)	3.5	ヨコナデ・摩耗の為不明瞭	ヨコナデ・ナデ・工具ナデ・沈線	C	良	橙色	7.5YR6/6	橙色	7.5YR6/6	
第８図15	２号竪穴	弥生土器	甕	(19.1)	-	-	(16.2)	ヨコナデ・指オサエ後ナデ	ヨコナデ・ハケ目後工具ナデ	A・C・E	良	橙色	7.5YR7/6	橙色	7.5YR7/6	外面にスス付着
第８図16	２号竪穴	弥生土器	甕	-	-	-	(10.7)	ヨコナデ・ハケ目後ナデ	ヨコナデ・ハケ目	A・C・E	良	にぶい褐色	7.5YR5/4	にぶい褐色	7.5YR5/4	
第８図17	２号竪穴	土師器	甕	-	-	-	(3.0)	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	A・C・E	良	にぶい褐色	7.5YR5/3	にぶい褐色	7.5YR5/3	
第８図18	２号竪穴	弥生土器	甕	-	-	7.5	(4.8)	ナデ・指オサエ	ナデ	A・C・E	良	橙色	7.5YR6/6	橙色	7.5YR6/6	外面に黒斑あり
第８図19	２号竪穴	弥生土器	甕	-	-	(6.6)	(5.4)	指オサエ後ナデ	ナデ	A・B・C・E	良	にぶい黄橙色	10YR7/4	明黄褐色	10YR6/6	内面にスス付着
第８図20	２号竪穴	弥生土器	甕	-	-	-	(2.2)	ハケ目	ハケ目・ナデ	A・C・E	良	にぶい黄橙色	10YR6/3	黒褐色	10YR3/1	ミニチュアか
第８図21	２号竪穴	弥生土器	甕	-	-	5.3	(2.2)	ナデ	ナデ	A・C・E	良	にぶい黄橙色	10YR7/4	にぶい黄橙色	10YR7/4	外面に黒斑あり
第８図22	２号竪穴	弥生土器	甕	-	-	(7.8)	(3.5)	ナデ	ハケ目・ナデ	A・C・E	良	にぶい黄橙色	10YR7/4	にぶい黄橙色	10YR7/4	
第８図23	２号竪穴	弥生土器	甕	-	-	-	(5.3)	指オサエ後ナデ	ナデ（工具痕）	A・B・C	良	にぶい黄橙色	10YR7/4	橙色	7.5YR7/6	台付脚部内面にスス付着
第８図24	２号土坑	縄文土器	鉢	(21.4)	-	-	(4.1)	摩耗のため不明瞭	摩耗のため不明瞭	A・D・E	やや不良	浅黄橙色	7.5YR8/4	浅黄橙色	7.5YR8/4	外面に黒斑あり
第８図25	２号土坑	弥生土器	甕	(9.6)	(10.8)	-	(12.1)	ヨコナデ・指オサエ・ナデ・摩耗の為不明瞭	ヨコナデ・ナデ・摩耗の為不明瞭	A・C・E	良	にぶい黄橙色	10YR7/4	にぶい黄橙色	10YR7/4	
第８図26	２号土坑	弥生土器	甕	-	-	-	(8.4)	ヨコナデ・ナデ・摩耗の為不明瞭	ヨコナデ・ナデ・摩耗の為不明瞭	A・B・C・E	良	明赤褐色	5YR5/6	明赤褐色	5YR5/6	小型
第８図27	２号土坑	弥生土器	甕	-	-	(7.0)	(4.9)	ハケ目・ナデ・指オサエ	ナデ・ハケ目	A・C・E	良	橙色	7.5YR7/6	橙色	5YR6/6	外面に黒斑あり
第８図28	２号土坑	弥生土器	甕	-	-	(7.2)	(4.1)	ハケ目・ナデ	ナデ・ヨコナデ	A・C・E	良	にぶい黄橙色	10YR7/4	にぶい黄橙色	10YR7/4	
第８図29	２号土坑	弥生土器	甕	-	-	(10.6)	(4.1)	摩耗のため不明瞭	摩耗のため不明瞭	B・C・E	良	にぶい黄橙色	10YR7/3	にぶい黄橙色	10YR7/3	台付脚部
第８図31	検出	須恵器	蓋	(10.9)	-	-	(3.1)	ナデ・回転ナデ	ヘラケズリ・回転ナデ	E・F	良	灰色	5Y6/1	灰色	5Y6/1	受け部径(12.8cm)
第８図32	P23	土師器	甕	(15.8)	-	-	(2.7)	ナデ	ミガキ・ナデ	A・C・E	良	にぶい黄橙色	10YR6/3	灰黄褐色	10YR4/2	
第８図33	P2	弥生土器	甕	-	-	-	(5.8)	ヨコナデ・ケズリ	ヨコナデ・ハケ目	A・C・E	良	褐灰色	10YR4/1	橙色	5YR6/6	外面に黒斑あり
第８図34	P10	土師器	鉢	-	-	-	(2.4)	布目痕	指オサエ・ナデ	A・E	良	橙色	7.5YR7/6	橙色	7.5YR7/6	製塩土器か内面布目痕
第８図35	P1	弥生土器	甕	-	-	-	(2.9)	ナデ	工具ナデ・ナデ	A・C・E	良	にぶい黄橙色	10YR6/3	にぶい黄橙色	10YR6/3	
第８図36	P23	縄文土器	鉢	-	-	-	(3.9)	ナデ	文様帯	A・C・E	良	にぶい褐色	7.5YR5/3	にぶい褐色	7.5YR5/3	
第８図37	P8	縄文土器	甕	-	-	-	(4.0)	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデか	A・C・E	やや不良	浅黄色	2.5YR7/3	浅黄色	2.5YR7/3	

※法量の単位はcm。()は残存と復元値を示す。

胎土：A角閃石　B石英　C長石　D赤色粒子　E白色粒子　F黒色粒子　G雲母　F砂粒子　H灰色粒子

第３表　出土鉄器観察表

挿図番号	遺構名	種別	器種	法量（cm）			重さ（g）	材質	備考
				最大長	最大幅	最大厚			
第８図30	２号土坑	鉄製品	鏃	5.8	2.1	0.4	8.2		

調査区周辺全景（西から）

調査区東側完掘状況（西から）

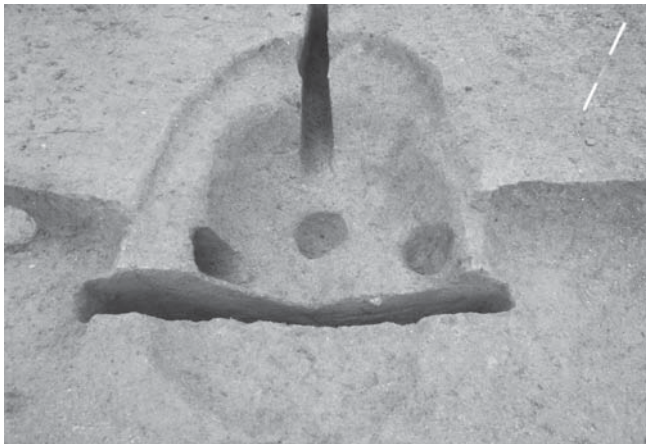
写真図版　2

調査区東側完掘状況（北から）

調査区西側完掘状況（東から）

① 1 号竪穴建物完掘状況（南西から）

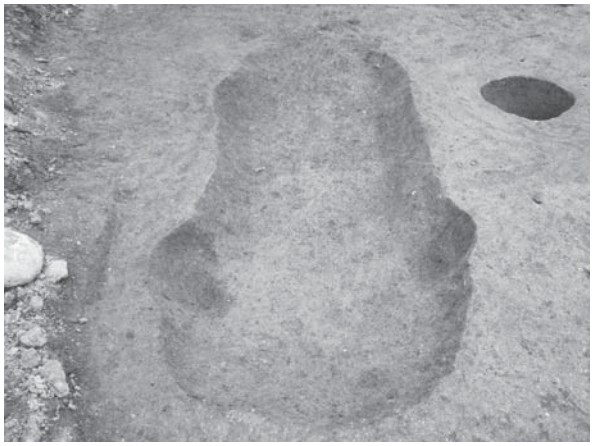
② 1 号竪穴建物カマド遺物出土状況（南西から）



③ 1 号竪穴建物カマド完掘状況（南西から）

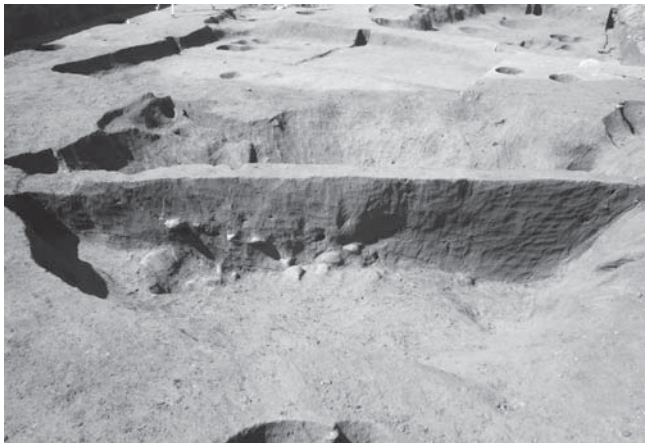
④ 1 号竪穴建物遺物出土状況（南から）

⑤ 2 号竪穴建物完掘状況（南西から）



⑥ 1 号土坑完掘状況（南から）

⑦ 2 号土坑完掘状況（北から）



⑧ 2 号土坑土層断面（北から）

写真図版　4

①調査区東壁土層堆積状況（西から）

② 8 トレンチ完掘状況（南から）

③ 9 トレンチ完掘状況（東から）

④ 10 トレンチ完掘状況（東から）

7-1

7-3

7-5

7-6

7-12

7-13

7-14

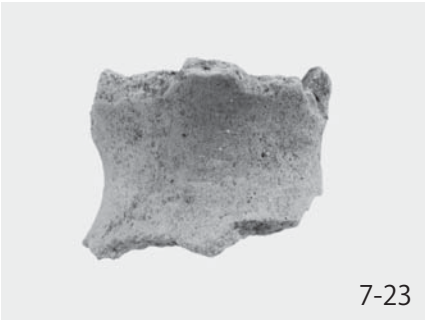
7-15

7-16

7-19

7-21

7-22


7-23

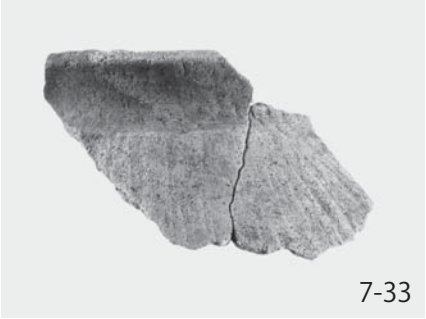
7-27

7-28

7-29

7-30

7-31


7-33

7-35

報告書抄録

ふりがな	てさきいせき
書名	手崎遺跡　３次
副書名	
巻次	
シリーズ名	日田市埋蔵文化財調査報告書／市内遺跡発掘調査報告
シリーズ番号	第 131 集／ 19
編著者名	上原　翔平
編集機関	日田市教育庁文化財保護課
所在地	〒 877-8601　日田市田島２- ６- １
発行機関	日田市教育委員会
所在地	〒 877-8601　日田市田島２- ６- １
発行年月日	2018 年３月 16 日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
てさきいせき 手崎遺跡	日田市大字高瀬	44204-6	204206	33°　18′　53″	130°　56′　59″	150603 ～ 150702	266 ㎡	記録保存調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
手崎遺跡 ３次	集落	弥生 古代	竪穴建物、土坑、ピット	弥生土器、土師器、須恵器	

要約

調査地は、日田盆地南部を流れる大山川左岸の標高約 100m、河岸段丘上に位置する。本遺跡では今回の調査を含め３次（箇所）にわたる調査が行われており、竪穴建物や土坑などが確認され、縄文時代後期から古代にわたって複数の時期で集落が営まれる。また、古墳時代後期になると建物の数が増え、集落規模が大きくなっていくことが分かった。

こうした背景には、調査地周辺が古代日田郡の石井郷に比定されていること、集落の立地が各河川に存在する集落へと向かう起点となる場所に位置すると推定されることから、この集落は、古墳時代後期以降、律令化に向かう中で交通網の整備に関連した場所であった可能性が想定される。

手崎遺跡３次

日田市埋蔵文化財調査報告書第 131 集

2018 年３月 16 日

編集　日田市教育庁　文化財保護課

877-8601　大分県日田市田島 2-6-1

発行　日田市教育委員会

877-8601　大分県日田市田島 2-6-1

印刷　日田時報紙器印刷株式会社

877-0086　大分県日田市二串町 345-3

日田市